

動画配信と論述課題によるオンライン授業の実践 —With コロナ時代の「深い学び」に向けて—

東京都立井草高等学校教諭
杉浦 光紀

1. はじめに

登校させずに授業する。誰がこの状況を予想できたか。新型コロナウイルス感染症予防のために、全ての学校が臨時休校を経験し、自宅学習の課題づくり、生徒への電話連絡や郵送の手配、さらには、オンライン授業の実践に奔走した。ICT環境が整備できていた学校はごく一部であり、オンライン学習を選択しない(できない)学校もあった。いずれにしても、既存の環境や条件で何ができるのか、教室での学習を前提とした教育の問い直しが迫られた。

本稿では、一方通行になりがちなオンデマンド型のオンライン授業に「対話」を生み出す手立てと、授業実践に対する生徒の反応を紹介する。その中で、オンライン授業の良さや学びの深まりはあるか、With コロナの学びとそのあり方を検討していく。

2. オンライン教育の手段

(1) オンライン授業とは

オンライン授業は、オンライン会議システムを利用した双方向型の授業と、課題・動画の配信システムを利用したオンデマンド型の学習に大別される¹⁾。

双方向型(同期型)
<ul style="list-style-type: none"> ・Zoom などオンライン会議システムを利用 ・生徒とやり取りができるが、時間の拘束あり ・通信環境によっては参加できない生徒も
オンデマンド型(非同期型)
①課題配信 ②授業動画 ③自学アプリ <ul style="list-style-type: none"> ・Classi や YouTube, 自校 HP などを利用 ・授業動画は自作するか、非自作の映像を案内 ・好きな時に自分のペースで学習できるが、生徒とのやり取りやアクティビティはしにくい
→統合型(Google Classroom, Microsoft Teams)

(2) 実践したオンライン教育の手法

本校は、動画+自宅学習で1コマの授業と想定したオンライン教育を実施した。課題配信システム等を利用せず、学校ホームページから、YouTubeの

動画の再生リスト(学年ごと、1週間分ごと)にパスワードを入れて、アクセスできるようにした。プリントは登校日の配布、またはダウンロードである。

授業者として、動画視聴後の学習を充実させようと、ウェブ上でアンケートを作成するシステム(Google フォーム, Microsoft Forms など。以後、Web フォーム)を利用した。そのシステムを用いて、生徒に毎回「振り返り課題」と「授業や課題で考えたこと、疑問に思ったこと」を入力、提出させた。

また、オンラインで自作した学習クイズに挑戦させられる「Quizizz²⁾」も適宜利用した。ランキングやスコアが表示されるので、楽しみつつ反復学習にもなる。授業動画は、黒板の前での撮影ではなく、PowerPoint に音声を入れて自作した。

3. オンライン授業の指導計画

「倫理」で実践したオンライン授業を事例とする。対象は、2学年(約40名×7クラス)である。

(1) 何ができるのかポジティブに伝える

初回の動画では、動画配信のスケジュールやWebフォームでの提出など、授業の見通しを示した。さらに、科目特性を含めて「自分に深く問いかけられる」メリットもあると、肯定的に伝えた。

動画+課題配信型の授業だからできること
メリット

- ・自分自身に深く問いかけることができる点
 - ・自分の考えを文章にする時間を確保できる点
- デメリット
- ・他者との意見共有や質問がすぐにできない点
- 「Web フォーム」に意見・論述や質問・疑問を記入、まとめてフィードバック!

(2) 授業設計—「青年期とモラトリアム」を例に—

①授業動画と振り返り課題

振り返り課題を念頭に、授業動画の内容に一貫性(関連性)をもたせるような授業構成が肝要となる。

◆授業動画の構成と提出課題

問いかけ (授業の内容・流れ)	概念・理論など (学ぶ用語)
あなたは大人？ 子ども？ (青年期の特徴)	マージナル・マン、 心理的離乳、 疾風怒濤の時代
「子ども」って、 どのような存在？ (子供概念の成立)	小さな大人、 通過儀礼、 青年期の延長
「大人」になるって何？ (青年期の発達課題)	ライフサイクル、 アイデンティティ、 モラトリアム
現代はアイデンティティの 確立が困難な時代？ (現代青年の状況)	フリーター、 モラトリアム人間、 パラサイトシングル
振り返り課題	
・土居健郎の文章を読み、その主張への賛否を、 授業で学んだ用語を2つ以上用いて論述する	

論述の手がかりとなるように、問いかけと流れ(内容)を順序立てた。動画配信後は、教室での対面授業のように、生徒の様子を見ながら説明の仕方を修正することができない。そのため、心理学や社会学などの用語(概念・理論)は普段より厳密かつ、丁寧に説明しつつも、20分以内の動画にまとめた。

◆振り返り課題の内容(「活用型の意見論述」)

資料集〇ページ「甘え」の充実している時代

土居健郎は「昔のような大人らしい大人はなくなって、子供のような大人がふえてきている。」(『甘え』の構造)と論じている。この意見に賛成か、反対か。現代の大人や青年をめぐる状況について説明した上で、自分の意見を述べよ。(150字以上)

ただし、授業で学んだ用語を2つ以上用いること。

- ポイント
- ・根拠や理由が明確であるか
 - ・用語が適切に活用されているか

振り返り課題は、自分の意見を根拠立てて論じるという資質・能力を使って、授業で学んだ用語を活用(応用)する学習を意図した⁽³⁾。資料集の文章を読解した上で、賛成でも反対でもよいが、何に注目するか。心理学の理論や経済的状況、社会の風潮や「大人」「子ども」の定義など、多様な観点から論じられる課題であり、自問自答すること(自己との対話)が求められる。さらに生徒の思考や表現の幅を広げ、見方や考え方を培うことにもつながる。

②フィードバック

生徒がWebフォームに入力した内容を整理し、「オンライン授業通信」を作成した。オンラインストレージにアップし、論述の具体例や、質問とその回答を共有した。教室のようにすぐには返答できないが、授業通信では質問に詳細に回答でき、多数の意見を取り上げることができた。それにより、自分以外の人の意見を読んで再び考えること(他者との対話)が実現されていた。AIテキストマイニングを使って、生徒の論述の単語出現頻度と重要度を加味して表示する「ワードクラウド⁽⁴⁾」の利用も試みた。

(2) 課題の具体例「著者の意見に賛成か反対か？現代の大人や青年をめぐる状況について説明した上で、自分の意見を述べよ。」

論述のワードをAI分析(ワードクラウド)

賛成・反対

賛成	反対
78%	22%

活用された用語(例)

用語	使用回数
ニート(反対)	55(24)
モラトリアム人間	52
パラサイトシングル	49
フリーター	35
通過儀礼(イニシエーション)	31(7)
モラトリアム	27
マージナル・マン	14
アイデンティティ	13

<具体例> (反対7、賛成11)を例示、順不同)

1	反対	私は著者の考えに反対である。しかし、子供と大人の区別が曖昧になったことや子供のようない大人が増えているということは興味した。お店や店員に怒鳴りつけている大人を見ることが難化するが、反対に怖い子供がしっかきしている所を見ることが怖い。現代、身は大人、心は子供という人々も少なからずいると私は思
---	----	---

「オンライン授業通信」の一部

4. 生徒の反応

生徒の意見論述(太字=活用した用語)

私は作者の意見に反対である。なぜなら、昔よりも人生の選択肢が増えたからだ。今から80年ほど前の戦時中は、国のために働く大人を増やすため子供でも「小さな大人」として扱っていた。このような厳しい時代背景が彼らの人格を構成したと言っても過言ではない。彼らには選択肢があまりなかった。しかしながら、現代は選択肢が増え、社会は個性いわば、アイデンティティを大事にしつつある。だからこそアイデンティティの確立をしっかりとするために、「**青年期の延長**」が見られるのである。選択肢が増えた今だからこそ、若者は迷い葛藤するのである。「**子供のような大人**」ではなく、「**大人のような子供**」なのだ。

土居健郎は著書で、甘えを「相手の愛情を当てにする感情」とし、これの蔓延により世代間境界の喪失が起こり、子供のような大人が増えているとしている。私はこの意見に賛成だ。現代、男女共に大学に進学する学生が増え、その為モラトリアムが伸びている。猶予期間の人生に占める割合が大きい程大人の自覚は芽生えづらくなるので、子供のような大人が増えているのではないだろうか。他にも、少し前の時代とは変化した出来事は多い。通過儀礼の形骸化もその1つの例である。この変化に伴いアイデンティティの支えにも変化が生じている。これもまた大人になりきれない原因を作っているのではないだろうか。

授業の感想

・動画を何度も聞き直しました。その度に自分なりの答えを考えて文にして、それを消してを繰り返していました。納得してから先生に送るように心掛けていました。…論述はやはり、自分の意見をこんなにも深く考える機会はなかったので、一つ一つを大切にしています。

・教科書・資料集を読み込んだり、言葉の意味を調べたりと自分なりに出来ることを工夫しながら取り組みました。…オンライン授業は正直不安でしたが、フィードバックが見られたりと意味のある経験になり、よかったです。(オンライン授業の受け方の振り返りより)

・論述課題の具体例(初回…人生について)を全て読ませていただきました。本当にこれは井草高校に通っている同級生のものなのか、信じられないほど素敵な考えで驚きました。それと同時に、今の私の考え、前回私が書いた論述の幼稚さを感じてしまいました。しかし、ここは良い方向に受け止め、素晴らしい様々な考え方を持っている人達と学習することができていると捉えて沢山吸収していきたいです。

(初回のフィードバックについての感想より)

5. 課題のあり方と生徒の学び

オンラインは、各教科が課題を次々に配信してしまうと、生徒の負担が重くなりがちである。その中で、授業動画は倍速再生であっても見てくれれば、御の字との考え方もある。しかし生徒の論述や感想からは、動画+課題&フィードバックの組み合わせが、「自己との対話」や「他者との対話」を生み、深い学びに誘うことがうかがえた。振り返り課題の論述が、自分に向き合い、深く考える機会となり、フィードバックが、他者の意見に向き合い、自己の学習を振り返る機会(メタ認知)となっていた。すなわち、①学んだ知識をもとに自分の考えを精緻化する学び⁽⁵⁾と、②共有した他者の意見により考えを相対化する学びである。オンライン授業で生徒に何を求めるのか、課題の量だけでなく質が問われている。

「自分は真っ先に賛成意見にしたので、反対意見の人の回答が楽しみです」「ネットでは得られない答えもこの世界に多くあることを実感しました」と感想を書いた生徒がいた。学校で「集団で」学ぶことの良さとは、ある問題について「どう思う？」と問いかけ、他者の「こう思うのだけど」という意見(異見)を共有し、自己の見解を磨くことにある⁽⁶⁾。このように考えると、「考えがいのある課題から逆算する授業設計」と、「生徒の問いや意見のフィードバック」は、教室空間とネット空間をつないだ With コロナの授業を構想する足がかりである。

6. 終わりに

教室の対面授業で学ぶことの価値は計り知れない。たとえば、最後通牒ゲームや貿易ゲームなどの体感的なアクティビティを交えた授業、生徒が協働して疑問の答えを追究したり、発表したりする学習、生徒の表情を見ながら教科書にとどまらぬ問題を問い、揺さぶるようなリアル授業でこそその学びがある。一方で、オンラインの利用で広がる学習もある。環境があれば、教室の外部との連携・交流や調べ学習での情報共有・資料作成などを促進できよう。教室とオンラインの双方の真価を問い、内容ごとに理解の質(学び方)を見極め、学習活動を工夫することが、コロナ下での主体的・対話的で深い学び(アクティブラーニングの理念)の実現ではないか。

オンライン授業では、生徒の学力差が拡大し、下位層が増えたとも聞き、学習を下支えする教師と教室の役割を改めて考えさせられた。普段からの自ら学ぶ力を養う学習と、コロナと人間、政治経済を正面から論じ、対話して、学びの意義が実感できるような学習が、今後への備えとなろう。現状では、教室で話し合う場合、距離をとって回数や時間を絞る必要がある。そこで、オンラインの手法(Web フォームや授業支援ツール)を教室授業にも活かし、事前に内容を共有すれば、短時間でも対話が深まりやすくなる。

学びがいのある問題とオンラインも利用した手立てを用意し、直接の対話に限らず、多様な考えをもった生徒が共に学び合う。そんな授業が創れたら、素晴らしいと思いませんか。

【註】

- (1) 吉本悟(福岡市立福岡西陵高等学校)「オンライン学習のデザイン」を参考に整理した。(https://sites.google.com/view/kyukowithict/オンライン学習のデザイン)
- (2) クイズの配信期間の設定や正答率の確認もできる。https://quizizz.com/を参照。
- (3) 国立教育政策研究所編『資質・能力[理論編]』(東洋館出版社、2016)は、考える力などの資質・能力を使って知識を学ぶ、手段かつ目的としての資質・能力を論じる。
- (4) https://textmining.userlocal.jp/を参照。
- (5) 北尾倫彦『「深い学び」の科学』(図書文化社、2020)は、心理学の「精緻化」を深い学びの1つとしている。
- (6) 教師が授業のねらいについて議論する重要性を説く、渡部竜也『主権者教育論』(春風社、2019)の結論に重なる。